

令和3年度 刈谷市 共存・協働のまちづくり推進委員会 第1回コーディネーター部会会議 記録

日時：令和3年8月16日（月）
午後1時30分～午後3時35分
場所：刈谷市役所 301 会議室

出席者

団体名・役職等	氏 名
愛知教育大学 教授	大村 恵
一般公募	大野 裕史
刈谷市自治連合会	尾島 輝雄
文化工房かりや 代表	久保田 富士子
株式会社おたより 代表取締役	塚本 裕晶
刈谷市小中学校長会	澤田 佳予子

欠席者

一般公募	及川 裕太
刈谷市ボランティア連絡協議会 会長	富田 宜弘

事務局

所 属	補 職 名	氏 名
市民活動部市民協働課	協働推進監兼市民協働課長	石川 領子
市民活動部市民協働課	課長補佐兼地域支援係長	石川 孝志
市民活動部市民協働課	協働推進係長	小原 崇照
市民活動部市民協働課	主事	西村 亜津
NPO法人ボランティアネイバース	副理事長・調査研究部長	三島 知斗世
NPO法人ボランティアネイバース	理事・事務局長	遠山 涼子

1 開会・あいさつ

- ・定刻になり、市民協働課課長が開会を宣した後、資料確認を行った。（略）

2 議題

(1) 部会長あいさつ

部会長より挨拶が行われた。

- ・これまで、まちコの育成や活性化に関する議論を進めてきたところ、今年度は幅を広げて、刈谷市の中でのまちづくり、市民の参加をどのように実現していくかご議論いただきたい。

(2) 推進委員会について

ア 基本方針

- 【資料1】を提示し、まちづくりコーディネーターについて事務局が説明
(令和2年度の活動実績)

- ・まちづくりコーディネーター（以下、まちコ）とは、地域の課題を「自分ごと」として考え行動し、ボランティアや市民などをつなぐお手伝いをする「まちのお世話役」である。
- ・登録者数は30人（うち、休止中6人）、現在活動しているまちコは24人（8月1日現在）。

ア：派遣：7件

- ・企画会議や講座のファシリテーション、かりや夢ファンド採択事業の取材・レポート作成（令和元年度新設）
- イ：定例会：5回（コロナ禍の影響により5回中止）

- ・まちコ同士の情報共有・活動検討の場。令和元年度に行ったポッチャ大会のふり返り・まとめ、交流会にむけた話し合いを実施。

ウ：交流会：1回

- ・1月30日 zoom 開催。「オンラインの会議をスムーズに行うコツ」ミニ講座（講師：大野委員）、「まちコブランドを自由に発想してみよう！」をテーマとしたグループ活動など。

（令和3年度の活動について）

ア：派遣：2件

イ：定例会：2回開催（4月・6月）対面、オンライン併用開催

- ・まちコブランドの発想を継続してエンブレムの検討を行った。

ウ：まちコゼミ：各1回（7月）zoom もしくは対面開催

- ・守随ゼミ（ファシリテーション）、大野ゼミ（オンラインの活用）、塚本ゼミ（広報）

エ：交流会

- ・まちコ全体が集まる場として、まちコ同士の交流を深める他、ゼミの活動や個人での活動を共有する。

オ：つなぎの学び舎

- ・「実践編 みんなの対話お助け隊コース」を6月24日より全5回オンラインに切り替え実施。
- ・「基礎編」10月から開講。9月1日号市民だよりに受講生募集記事を掲載する。

■質問・意見交換

（まちコ活動への参加人数）

委員：コロナの影響で活動への制限がある中で、定例会には何名参加しているか。また派遣について、依頼元の評価を把握していたら教えていただきたい。

事務局：令和2年度は、交流会7名、定例会は各回平均6名の参加であった。令和3年度は、4月の定例会は9名、6月は10名が参加した。7月以降はまちコゼミへ開催形態を移行した。（依頼者の評価については、住民会議の依頼をしてくれた地区からフィードバックをもらった際、まちコの活動の様子が今後の自治会運営の参考になったというような意見をいただいた。）

事務局：コロナの影響に関して、オンライン開催したことによりしばらく足が遠のいていた方の参加につながった効果もあった。

部会長：派遣人数は、住民会議のファシリテーション1件（3名）、ファンドレポート作成3件（各2名）、講座のファシリテーション2件（6名、2名）、実行委員会のファシリテーション1件（2名）、計19名、実働している方は24名である。

委員：定例会の参加者が、登録者30名のうち6名という結果は少ない。対策をいくつか講じているものの目に見える成果はまだ確認できていない。

（まちコゼミ活動報告）

委員：ゼミはどれにでも参加できるよう、開催日を分けている。大野ゼミでは、オンライン参加とハイブリッドで開催した。7月の第1回目は5名参加した。最初に話し合いたいテーマについて意見を出し合った結果、zoomの利用方法とした。次回は8月24日の予定。

また、ホームページ「まちコルーム」を制作した。オンライン上の掲示板で情報共有や、スケジュール共有に活用している。

委員：塚本ゼミは7月に第1回開催。仕事の都合、昼間に開催したこともあり、2名の参加であった。「まちコレポート」と題したまちコの取り組みを伝えるレポートの制作をテーマに意見交換した。まちコの認知度を高めるため、今年度は地区長を対象を絞り広報の取組を行うこと、アンケート調査を行い、広報PR前後の認知度の変化を確認することを検討したが、コロナ禍で会合が休止しており、調査は実施できなくなった。PR資料の設置場所を増やすことについては、コストがかかるだけでなく、成果を測ることが難しい。

仮に認知が広がったとしても、コロナ禍では住民会議依頼がなく実績につなげられない点も課題であるが、派遣依頼は減っていても、まちコ個人々の活動は行われていることが確認できた。令和4年度のアフターコロナのまちコ活動をサポートし、SNSの活用も含めて、まちコと一緒に市民に働きかける下準備を進めていくことを検討している。

事務局：守随ゼミは7名参加。ファシリテーションをテーマに、参加者から疑問・質問を取り上げ、スキルアップに取り組んでいる。次回は9月か10月に予定している。

委員：これまで、「まちづくり相談会」を月1回、定例会と同じ日の16時~から開催していた。コーディネーターに限らず、まちづくり全般の相談に応じ、オンライン開催もしてきた。まちコの相談に対応する点はゼミと共通するため、次回は合同開催する。オンラインに関するテーマとしては、参加はできても主催はできないという相談が多い。

(まちコ登録者を参加につなげる工夫)

部会長：登録者のうち、実参加者は10名、参加していない方は14名。なぜ参加しないか、把握している情報があれば報告いただきたい。

事務局：仕事の都合で開始時間(平日19時~19時半)に間に合わない方が複数あった。参加者と意見交換をする場に参加したいが、テーマが用意されている場合は遠慮するという声も聞かれた。

委員：魅力があれば、予定を調整して参加するだろう。修生生にとって勉強したテーマは十分と捉えられているのか。参加していない方については把握できない。自分自身の活動の今や今後について相談したいと考えている人が多い。ゼミを通してまちコの想いを把握しようと取り組んでいる。

部会長：ゼミでは、参加者から課題を出して意見交換している。まちコゼミの結果を参加していない人に対して伝えることを検討できないか。

委員：「まちコルーム」を活用したホームページをつくろう！とまちコから手が挙がるとよいが、まだ見通しはない。まちコの説明や活動紹介、技術や技能が身につく、地域や仕事で活かせるという点が伝わるサイトができるとよい。まちコ登録者に利用を限定したサイトもよい。活動の苦労した点や成果を紹介したり、ゼミでの学びやレポート作成が役立ったりした点が見えるようになれば、取組につながる事が期待できる。コロナの影響で人の動きが制限される中、形づくるには時間がかかるだろう。

部会長：「まちコルーム」の掲示板に、ゼミ活動の様子を参加者に書いてもらうことはできないか。

委員：写真やzoomの画面を載せるなど様子が伝わるものでもよい。まちコルームは、googleカレンダーと同期してスケジュール共有でき、素晴らしいサイトを作っていただけだ。

委員：掲示板(まちコルーム)は無料のサーバーを利用している。ホームページの制作に関しては、googleの提供するサービスやワードプレスも活用できるが、自身が時間の確保が難しく作業できない。

委員：まちコ自身が活動するフィールドで役立つスキルや知識を獲得して成長することに重きを置くこともよい。広報では、まちコを市民・一般への周知に役に立てたい。認知度や、依頼に関するニーズを把握する必要があらうが、広報の絶対量が少なく、計測することが難しい。

たとえば、子ども会の運営や、学校や地域で学生と一緒に活動するなど、自分の活動につながるメリットが確認できれば、講座を受けたい人が増えるだろう。また(まちコである)スポーツ推進委員と一緒に活動するなど、まちコの個人活動を後押しすることで認知度の広がりも期待できる。まちコを知ってもらうための取組、認知を高める取組について、ゼミで検討する。

まちコのしくみは全国的にも先進的である。市民活動に積極的に取り組みスキルアップを目指したり、知見を活かして活躍しているストーリーが形となり、ホームページやSNS、資料を通して伝えていけるとよい。

委員：令和元年度にプロジェクトマネジメント講座で講師を務めた。ポッチャイベントの開催を実践したところ、参加したまちコは積極的に楽しみながら関わっていた。顔をあわせて意見を交わすにはオンラインの制約があるが、スキルにつながる講座の開催を通して、実践につなげられるとよい。自分自身のステップアップにつながると理解できれば参加につながる。

委員：「ゼミ」に堅いイメージがあることと、事情によりオンライン参加が難しい。魅力がないという点について、参加者が横のつながりで、参加した方から誘うようになるとよい。期ごとにつながりが強く、特に3期生はLINEで情報共有しているので、つながりで誘い込むことも大切である。今日やったことを、個人的にでもよいので一本釣りでも声をかけていくと、参加者が増えていくように感じる。議事録だけでなく、臨場感のあることばで誘ってもらったほうが参加しやすくなるのではと

部会長：次は誰か誘ってこようよ！と声をかけて広げていくとよい。

（寄り添い型の支援）

委員：基本的な相談事は、自分たちで解決する人材が地域には多数ある。重原では最近マンションが建ち、自治会に加入しない世帯もあるが、地区の行事、たとえば盆踊りや運動会には子どもを連れて若い方も参加し、盛んに開催している。敬老会のイベントは、公民館と連携して取り組んでいる。地区ごとに、行事を楽しくしたいという思いで取り組んでいるが、コロナ禍ですべてイベントは休止とした。終息後を見据えた行事づくり、地域活性化の行事を作りだしていくことについて、地区長や地区役員で考えている。そうした機会にまちコの方に参考意見を求めることは可能である。

委員：自治会、地域や公民館が行うイベントは、例年同じとすることが多く、新たに行事を企画することがなれば、まちコに頼む必要性は感じないだろう。住民会議のファシリテーター派遣のしくみはよい制度であるが、地域を一巡した感はある。二巡目三巡目につなげるには、住民会議を経てどのようにイベントを進めるか、地域の本質的な欲求への対応が課題として残った。以前、まちコにイベント当日も参加してもらって盛り立ててもらったことがある。今まででやったことがないことをやってみようというときに、力が出せるし求めに応じることができる。新しいことをやってみようとチャレンジする自治会はまだ少ない。今年度、自治連合会会長を務めており、集まりの際に紹介することも検討したい。

委員：「重原福祉委員会」では、社協から助言を受けて活動している。重原地区では防災の集いを、地区長を中心とした自主防災会が主催して3月に開催予定である。講演会と、3ブースを設けて、そのうちの一つにポッチャを楽しむコーナーを企画しており、詳しい人に指導してもらおうと社協に依頼した。その他、防災スリッパを親子で作るブースを赤十字に、消防団には幕当てを担当してもらうなど、親子で楽しめるゲームの要素を盛り込み企画している。

部会長：寄り添い型の支援に関して、交通費などは支援できるか。また、派遣の一項目とすることはできるか。

事務局：支援できるが、ケースによる。住民会議とセットにする必要はなく、地区からの依頼として受けることはできる。

部会長：住民会議のサポートの例として、寄り添い型の取り組みも加えらるとよい。

委員：社協の職員は職務の一環であるが、まちコはボランティア活動であり、交通費程度の補助である。「寄り添い型」の活動について、まちコ登録者への確認はまだとっていないのではないか。

部会長：定例会などの機会に寄り添い型支援に取り組むことについて承認を得るとよい。

（まちコ個人の活動から認知を広げる）

委員：まちコとして、人のつながりを期待され、声をかけられて活動していることが2つある。協働課を介して実践したら“寄り添い型”として、まちコの活動として認知度アップに繋がれるということか。

部会長：まちコの仕組みとして活性化するだけでなく、ご本人へ多少の支援がある。

事務局：スポーツ推進員の“〇〇さん”を頼って声がかかるケースが多い。まちコの活動としては表に表れない面である。

委員：久保田さんやスポーツ推進員といった特定の方へ相談が持ちかけられるように、個人としてのフィールドで活躍している方が多い。持ち場で活躍されている方が多く、その方にまちコの肩書が追加されている。久保田さんみたいになれるなら勉強してみようかなと思ってもらえるような個人の活動に光を当てたPRを展開して、まちコの方には「まちコです!」と名乗って活動してもらおうとよい。

委員：ちらしに「協力：まちづくりコーディネーター」と掲載することで、PRにつながるか。

委員：団体だけでなくまちコに紐づいているネットワークに広がる。個人で受けている活動がまちコとしての活動と認知が広がることで、実績につながるとうい。

（地域課題の掘り起こし）

部会長：同じイベントを毎年行う上でまちコは必要ないという指摘は確かであるが、尾島委員のご指摘のとおり、地域の変化がある。新たな住民の方が自治会に加入したり、巻き込むイベントをどのように企画するかなど、地域の課題を意識化することで、まちコの活用につながるのではないか。課題を掘り起こしていくことができるとよい。

委員：参加者を増やすノウハウをすべてのまちコが持ち合わせているわけではないが、一緒に考える役割である。

委員：自治会に参加しない人が増えている課題に対して、まちコに来てもらってこんなよい点があったよと、他の地域で活躍している様子が伝わることにより、拡がり期待できる。団体がまちコに依頼して、活動をブラッシュアップしたなどPRできるとよい。まちコにとっても出番があると意欲につながる。

部会長：コロナ禍で全体の活動量がなくなる状況だからこそ取り組まねばならない点がある。高齢者の機能低下や、こどもの将来への影響も懸念される。今だからやれることを投げかけることはできる。新たな住民が増える中、こどもが行くことができる地域の居場所はあるか。公園の利用制限などにより、以前に比べて出会いの場がなく、つながりがうまれにくくなっている。意図的に作る必要がある。

委員：西部地区では子どもの数は増えている。両親は共働きで、祖父母は外出を控える傾向にある。子どもだけで一緒に遊ぶ場は少ない。

（企画運営のサポート「企画運営お助け隊」）

委員：子どもたちだけで遊ぶことは難しく、習い事があると時間がない。共働きの家庭は忙しいため、学校行事を外注のように企画を依頼するといったまちコの活躍の機会があるとよい。親同士、親とまちコがネットワークでつながるきっかけとなる。PTAに関わっていた時には、行事へのまちコの参画を検討したこともあった。

委員：まちコへの依頼はファシリテートが中心。市民活動センターでは、活動に寄り添いながらサポートしている。たとえば、半年後にイベントが予定されていれば、打合せや事業を一緒に進める。最後まで定期的にサポートする。まちコが関わる場合、複数回活動することができるか。まちコ自身の負担も考慮して、今後の活動を検討していけるとよい。

「企画運営お助け隊」として実践できる。依頼できることを受け手に伝える必要があるし、まちコ自身が事業に寄り添う活動に対して自信を持つ必要もある。

■【資料2】を提示し、令和3年度以降のコーディネーターのネットワーク化について事務局が説明

（共存・協働のコーディネーターを刈谷市で育てていくために／平成22年3月）

- ・平成21年度推進委員会の協議により、コーディネーターを育てる3つの方策を策定。方策1：まちコの登録制度、方策2：つなぎの学び舎により実践したが、方策3：ネットワーク化は未着手である。

- ・まちコの他にも「コーディネーター」の役割を担う人を顕在化し、コーディネーター同士のネットワーク化を検討する。

(部会で検討するテーマ)

- ・第1回：コーディネーターの役割を担う人を挙げ、ヒアリング候補を検討。
- ・第2回：ヒアリング結果を共有し、コーディネーターがつながるネットワークのあり方を協議する

(資料2-(3) 成果イメージ)

- ・コーディネーターの存在が顕在化し、コーディネーター同士が接点を持つことを通して、まちコの活動の周知が進み、まちコのすそ野が広がること。
- ・コーディネーターの活動や経験を学ぶ場を設けることで、まちコの知見が広がり、またまちコの活躍の機会が広がること。

■質問・意見交換

(コーディネーター役を担う人をつなぐ)

委員：まちづくりに携わる人は多数ある。自治会長はコーディネーターの役割をしているなど、対象となる人はたくさんいるが、登録の制度が敷居を高くしていないか。自称でよいのではないか。企業や団体に制度を知らなくても活動している人は多くいる。登録者だけでなく、そういった活動をしている人が多くいることが伝わるとよい。その人たちが横つながるネットワークが組めるのはよいことである。まちコの敷居を下げていけば、広がりが期待できる。登録制度をなくす提案ではない。要件に当てはまる人は多数あるが、登録はあまりされていないので、登録自体が進んでいない状況である。

事務局：持ち場で活躍するコーディネーターとして、地域のさまざまなコーディネーターについて意見を出してもらい、議論を進めたい。

委員：身近な例では、ボラセンのスタッフのうち、登録者は実践編の修了者だけである。②地域活動・市民活動を2年以上行ってきた人、③仕事としてコーディネーター業務を2年以上行っている人、を増やしていくとよい。

地域団体に関わり、受ける側になって分かった点として、どこに声をかけていいかわからないということである。新しいことやろうと思っても誰に相談したらいいかわからないが実情。寄り添い型だと、受けた側も自信を持ってまちコと名乗れるのではないか。

(地域や市民の困りごとをまちづくりにつなぐ)

委員：平成21年当時、まちコの存在の必然性が明確であったように思う。共存・協働のまちづくりは、今の刈谷市をどんなまちにしていきたいか、理想とする姿に対して不足する点があり、事業として立ち上がってきたと推察する。市民として暮らす中で困っている点やニーズも把握されている。理想や目指すものがあり、ニーズや困りごとが市民の中にあり、それを埋めるのが施策である。部会では有効性や妥当性を検証する役割と認識している。

コーディネーターの登録やコーディネーターがつながりあうことで、間を埋める施策として適切か、困り感やニーズを明確に把握していなければ、妥当性が判断できない。市民のニーズに合っていないと、上滑りの懸念がある。自治会や子ども会での困り感が、まちコやまちづくりの動きとつながると有効性がある。市としてニーズをどう把握して、それがどうなることが理想か。

事務局：地域を活性化し、市民が自分ごととして取り組む活動を目指して取り組みを始めた。地域活動は活性化している地区もあれば、加入率が下がる地区もあり、課題に対応するねらいはある。また、まちコの役割として地域に望まれるもの、まちコ自身が望むものを把握したマッチングをすることで、それぞれのニーズを満たした活動とする必要がある。実際に、地域のニーズに対応した活動や回数が提供できるか、検討する必要がある。個人のつながりあい広がりが、ネットワークを通して、活動の活性化につなぐ必要があると考える。

部会長：ベースとなるのは自治基本条例である。かつてのように自治体がすべてを抱えて市民の暮らしを支えることはできなくなっており、同時にコミュニティ・地域共同体が崩れてきている中、人と人とのつながりをいかに取り戻すか、市民が自治に参加するためにどうするか、といった状況を受けて刈谷市ではまちコを養成する。活動する人と人をつなげることで、ネットワークを広げていこうというのが今回の取組である。地区長や市民活動の中でコーディネーターの役割を担っている人は多数いる。コーディネーターの役割を持つ人を再編成していこうということが今回の提案である。

それぞれの地域課題は他にあり、コロナ禍の子育て、高齢者や認知症の問題、精神障害のある方が安心して暮らしていけるまちづくり、防災など、この部会でもいろいろな生活課題が語られている。それを解決する自治体と市民、団体、企業とその協働をどうするか、課題である。どうつなげるかということよりも、しくみを、市民が参加するしくみをどうつくるかという段階にある。それぞれのニーズがマッチングできなければエネルギーにならないし、組織づくりの意欲にはつながらない。双方を大切にすることが必要である。

（さまざまなコーディネーターを包摂するしくみ：ネットワーク）

部会長：学校でコミュニティスクール化が検討されている。住民と学校、子どもたちとつながる、コーディネーターの役割を育てなければならない。まちコや学び舎など刈谷市の取り組みとつながるかどうかがこの分野だけの制度にせず、いろんなコーディネーターが包摂されるような大きな枠組みにしていこうとよく考えている。

委員：ネットワークですよね。企業の社会貢献部門、市民活動センター、公民館や学校もある。市民活動センターに相談に来た方に、公民館のあの人に聞くとよいよと伝えられる仕組みがない。それができればあちこちにコーディネーターがいると感じられるまちになる。地区長はOBになっても活動に参加する人は必ずいる。どんなに声をかけても参加しない方もいる。その中間にOBになっても参加してくれたり、頼まれたら参加してくれる人たちは興味関心がある。そういった方をベースにして、その中で声をかけてまちコとして称号を与えていけるとよい。しくみになると、住みよいまちになる。

部会長：まちコという概念・理念はいろんなコーディネーターを差すとした方がよいのではないかと。

委員：市民活動センターは市民活動団体をコーディネート、企業はコンサルタントとしてプロボノなどをコーディネート。行政区、自治会を支援する人はほとんどいない。まちコの対象範囲である。市民活動センターに自治会が登録しても支援の経験がないため、まちコが包括的に取り組めるとよい。

（次世代育成の場として学び舎やネットワークを活用）

部会長：学び舎もいろんなコーディネートが出会い、得意分野を出し合いながら学び合う場になるとよい。

委員：次を担う人たちに来てもらい、そこで勉強する機会として活用してほしい。

部会長：それぞれのコーディネーターの次世代の養成の場として活用してもらえるとよい。

委員：中高生にまちづくりは楽しいよと伝えていってもよい。

部会長：中高生のためのまちづくり養成講座があってもよい。

委員：大村先生にぜひ取り組んでいただきたい。

（ヒアリング候補の検討）

事務局：様々なコーディネーターとまちコをマッチングしていくため、まちコのみなさんにも意向を確認しながら、ヒアリングを実施。第2回部会で報告し、次年度以降、つながりあうための方策を検討する。子ども会、地区長の方など、ヒアリングの対象をご紹介いただきたい。

●自治連合会

委員：自治連合会からヒアリング先を推薦してもらおう。まちコの派遣を受けた地区を対象に感想や今後の希望を聞き取ったり、寄り添い型の活動では地域から相談したいこと聞き取ったりできる。

●スポーツ推進員

部会長：スポーツ推進員が候補に挙がっている。中学校区ごとに地域総合スポーツクラブがある。その中でコーディネーター役を担うのがスポーツ推進員である。小中学校のクラブ活動のための連携などにおいて期待されている。社会福祉の分野では、地域福祉計画でのコーディネーターの役割は？

●福祉委員会

委員：北部中部南部に地区社協を設け、その中に福祉委員会を設置する予定である。地区社協の担当者が寄り添い型でサポートしている。市から自治会へは、公民館、市民協働課、福祉委員会（社協）と3つのつながりがある。地区の課題はイベントと防災訓練と、介護福祉は民生委員と連動して取り組まれている。3つの分野でそれぞれ取り組む人から話を聞けるとよい。社協と連携するとよい。

●地域包括支援センター

委員：地域包括支援センター・生活支援コーディネーター。ボラセン米田さんも。ボラセン登録団体に実働団体をよくご存じである。包括センターは地域サロンを把握している。高齢者福祉のネットワークを把握されている。地域でネットワークャーとして活動している人から話を聞いてもよい。長寿課の会議で確認するとよい。

●防災ボランティア

事務局：防災ボランティアのしくみがある。刈谷で防災ボランティアのしくみがあり、各地区の防災訓練で活躍している。

●民生・児童委員

委員：地域団体には、福祉委員会（社協）、地区委員（市民協働課）、生涯学習課（公民館）とつながりが深い。それぞれのテーマに共通する部分は多い。

部会長：福祉分野において、民生委員・児童委員での中心的なコーディネーターの方はあるか。

事務局：全体会のしくみがあるが、中心的役割は設けられていない。

部会長：名古屋市では、民生委員・児童委員が子育てサロンづくりをサポートされている。刈谷市ではどうか。愛知県では子育てネットワークャーの養成に取り組んでいた。

●子育てコンシェルジュ／子育て支援センター

事務局：子育てコンシェルジュの制度がある。子育てに関する情報提供をワンストップで伝えるしくみがある。相談役である。北部中部南部にある子育て支援センターでは相談に対応されている。コーディネーターというより相談役である。

部会長：コーディネーター役を担う職員がいるか。アウトリーチを担っていればコーディネーターの役割といえる。

●多文化共生／国際交流協会

部会長：愛知県では多文化共生コーディネーターの養成があるが、刈谷市ではどうか。

事務局：現在、コミュニティづくりに取り組んでおり、国際交流協会、協働課がコーディネーター役を担う。

●商工会議所／企業内コーディネーター

委員：企業の福利厚生やリタイアした方の活躍検討としてクラブ活動が取り組まれている。災害時にコーディネーターを派遣したり、こどもたちに折り鶴を贈る活動をしたり、ボランティア活動のコーディネーターは管理職の方が担っているのではないかと。中小企業の場合は商工会議所が担うこともある。

●学校

部会長：地域学校協働活動推進員の動向はどんな予定か。

委員：来年度、立ち上げの動きが始まる予定。現在は、学校評議員会という組織を持ち、ご意見いただきながら運営している。その場にコーディネーターの立場の方が加わる想定である。学校が主体的に取り組むことを軸に、学校や地域について理解のある方にご意見をいただく組織を立ち上げる。新しいことをやりたくてもできないくらい、やらなければいけないことが多い中で、先生を中心にオリジナリティを出そうと常に改善を図っている。

外部の協力のニーズとしては、部活動の指導者がある。部活動は子どもにとって大切な場であるが、先生の業務にかなり負担をかけている。部活指導において協力が得られると、特に中学ではありがたい。

委員：企業に関わる団体では、スペシャルオリンピクスがある。

委員：ボランティアベースであり、継続的に取り組んでいただくためには課題がある。学校教育の範疇での部活動であることと、技量を高めていくことの兼ね合いが難しい。

3 その他

(1) 市民協働課より連絡

対面の開催を前提とするが、コロナの状況をふまえオンラインも含めて開催方法を検討する。

【コーディネーター部会】

- ・第2回 令和4年1月24日(月) 13時30分～

【推進委員会】

- ・第2回 令和3年10月13日(水) 13時30分～

以上